

Actions アクションズ

若手医師活動報告

新型コロナウイルス感染症に関連するアンケート調査結果報告

旭川医科大学復職・子育て・介護支援センター助教

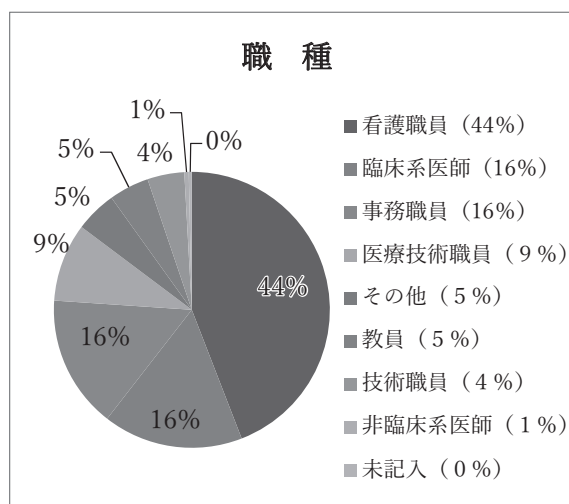
菅野 恭子

新型コロナウイルスによりこれまでの生活が一変したが、北海道の新型コロナウイルス感染者数が2月下旬全国最多へと一気に増えたことを受け、全国に先駆け2月28日緊急事態宣言が発令され、それにより外出制限や学校の休校などによりさまざまなところで影響を受けた。そこで当センターではいち早く、病院・大学の業務、家庭生活にどのような影響があったか、5月にアンケート調査を行った。またその結果をもとに今後の支援活動を検討していくことにした。

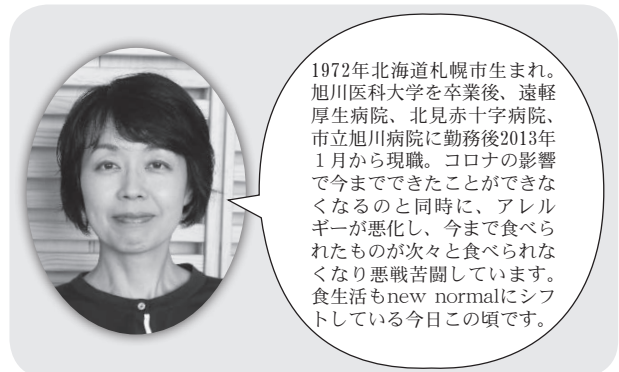
対象・方法：旭川医科大学病院に勤務する全職員に紙媒体でアンケート用紙を各部署に配布し、回収ボックスに投函する形で回収した。アンケート用紙は2017枚配布した。

主な結果：回収枚数は1383枚、回答率は68.5%であった。

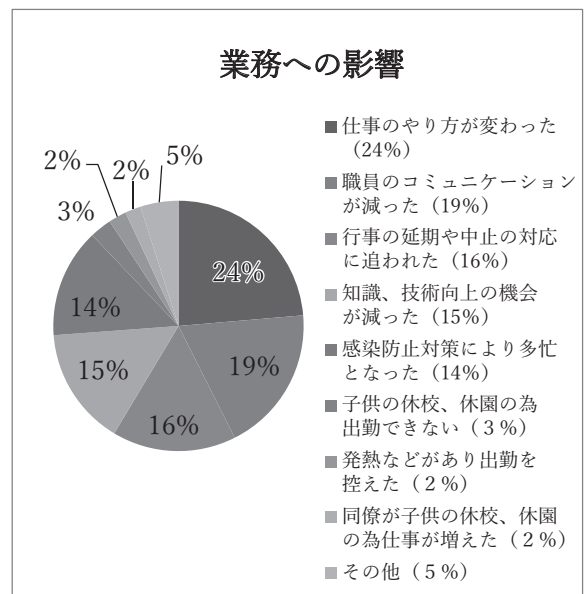
回答者は看護職員が最も多く、次いで臨床系医師、事務職員から回答を得られた。



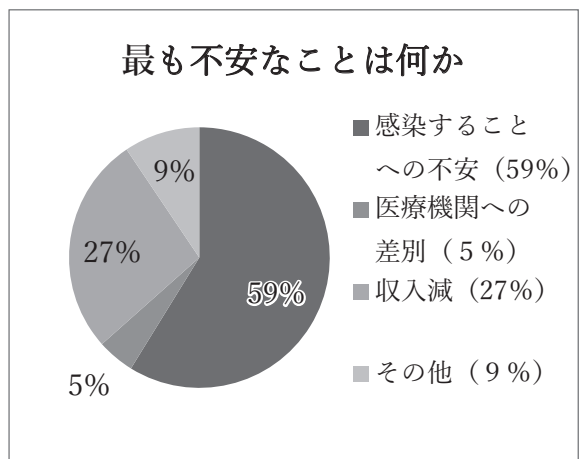
業務への影響の問いでは新型コロナウイルス感染症により仕事のやり方の変更を余儀なくされ、職員のコミュニケーションが減ったとの回答が多かった。行事の延期や中止により対応に追われ



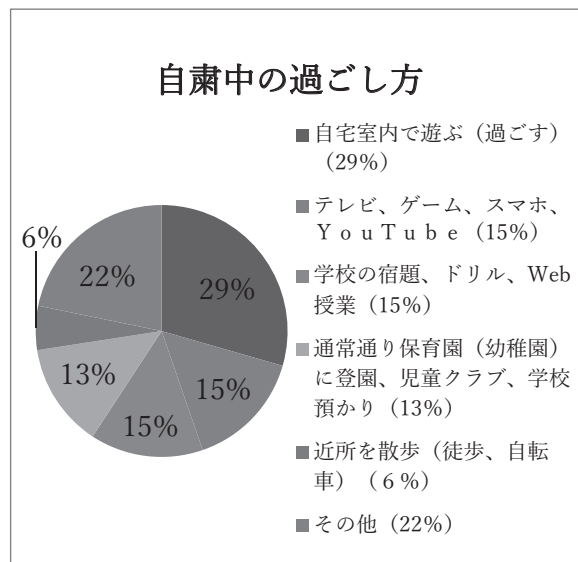
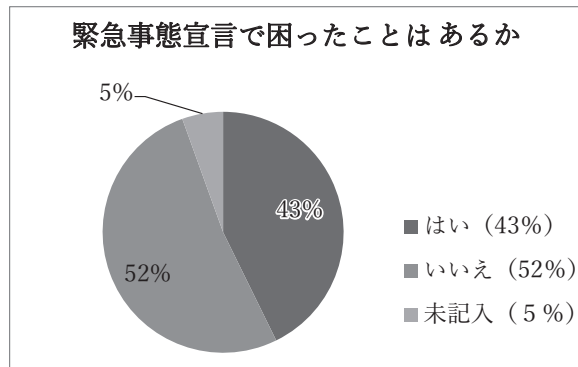
た、知識、技術向上の機会が減った、感染防止対策により業務量が増えたという回答も多かった。



仕事を続けていくうえで最も不安なこととして、59%が感染することを挙げており、27%が収入の減少と回答していた。

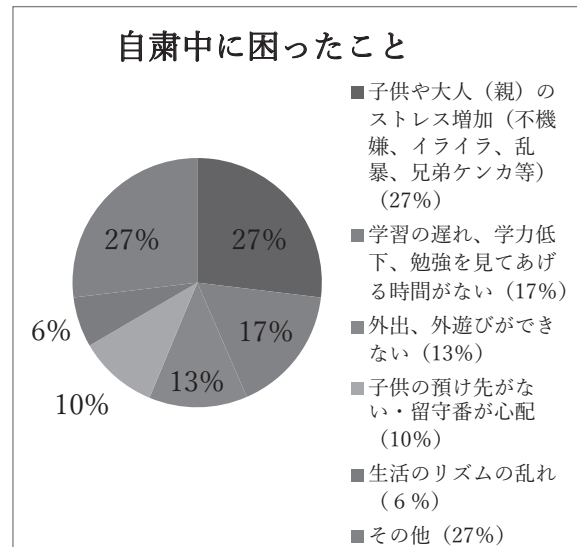


緊急事態宣言で43%困ったことがあると回答しており、具体例として出張や外出ができないことによる物理的な面とストレスを挙げていた。子供の自粛中の過ごし方として大半が自宅で勉強したり遊んだりして過ごしていたが、通常通り保育園に預けたり児童クラブや学校に預けている職員もいた。



自粛中の困ったこととして、子供をもつ職員は子供が自宅で過ごす時間が長くなることで親子のストレスによりイライラしたり、不機嫌になった

り、兄弟げんかが増えたとの回答が多くみられた。勉強の遅れや学力低下を心配した回答もそれに次いで多かった。外遊びができないことや子供の預け先がなくて困ったとの回答もあった。



センターに期待する支援の問いに対しては、これまで通りの支援を継続してほしいという意見がある一方、休園、休校時の預かり先を提供してほしい、病児・病後児保育、バックアップナースの対象拡大、増員してほしいとの回答が多かった。

当センターでは病児保育を行っているが、院内感染のリスクを避けるため緊急事態宣言時は受け入れ児を外傷のみとして対応した。感染症の性質上、院内感染を未然に防ぐ意味でも緊急事態宣言時での児童の預かりは困難と考える。毎年定期開催しているセミナーも中止し、解除後はWebでの開催を予定している。今後も長引くであろう新型コロナウイルス感染症だが、このような状況下であっても支援できることを模索し、これからも発信していきたい。

新型コロナウイルス感染症関連情報

新型コロナウイルス感染症に関する日本医師会からの通知等は、北海道医師会ホームページ「医師の皆様へー感染症情報」に掲載しています。

URL : <http://www.hokkaido.med.or.jp/doctor/infection.html>